

「幼稚園教育実習に対する学生の意識について」

盛岡大学 文学部児童教育学科

市原常明

1. 目的

本学文学部児童教育学科の幼稚園教育実習は、3 年次においては 5 月に 1 週間の前期実習を 8 月末から後期 3 週間の計 2 回、4 年次においては 9 月下旬から 2 週間、本学附属幼稚園を始め出身園を中心に行われる。もとより教育実習は教諭免許必修科目であり、教育課程を履修した学生が大学で学修した理論や知識・技能を教育現場で実践し確認することのできる集大成とも言える機会である。教育実習が如何に充実するかが、その後の教師となることの意欲、使命や責任の重さの自覚に影響する。

本研究は、学生の教育実習に対する意識を明らかにすることで、実習指導を改善するための示唆を得ようとするものである。

2. 対象及び調査項目

調査対象者は、平成 29 年度幼稚園教育実習履修者 84 名（3 年生 49 名 4 年生 35 名）とした。調査時期は、平成 29 年 7 月上旬に教育実践研究Ⅱ（事前指導）において質問紙を配付し、後日提出させた。

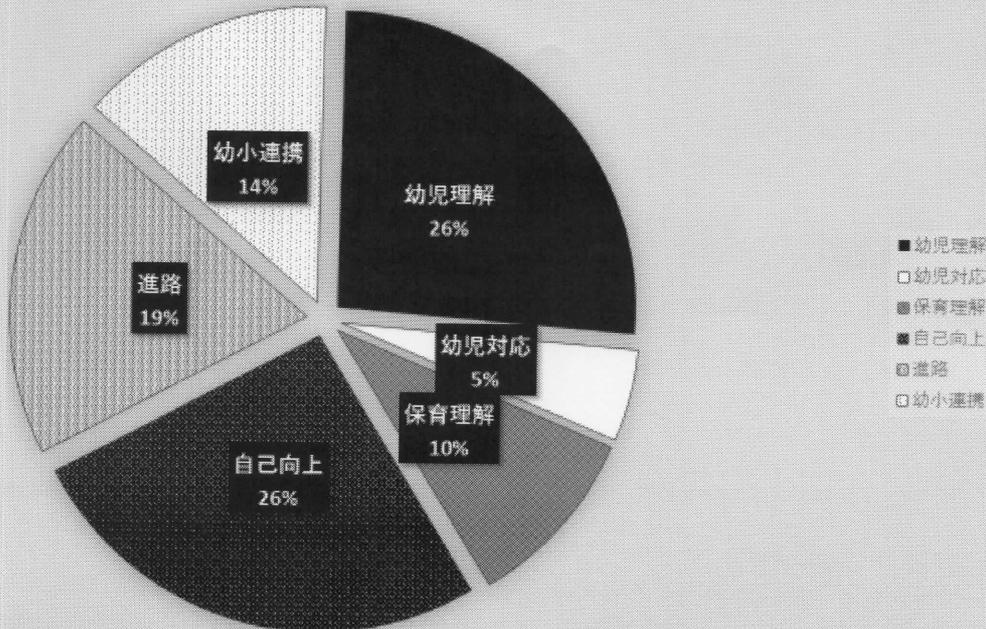
調査項目は、実習に対する期待感、心配等である。また、5 月に前期実習を終えた 3 年生に対しては実習の自己評価を追加して調査し、実習園が行った実習評価表と比較検討した。

3. 結果及び考察

1) 実習に対する期待感

学生の実習に対する期待は図 1 の通りである。幼児教育は幼児の姿を元に保育が展開されるもので、幼児理解がその基本ある。また学生の多くは子供が好きで幼稚園教諭を目指している者も多い。その事が、幼児理解及び幼児対応といった幼児と触れ合うことが、学生が実習に対する最も大きな期待となったのであろう。次に、教師を目指す者としての資質向上が高かった。前年の 3 年次に小学校実習を履修済の 4 年生は、幼小の連携を挙げている。また、2 割の学生は自己の将来の進路を見定める機会として捉えている学生もいることがわかり、より充実した教育実習が行われるための指導が求められる。

図1 実習での自分に対する期待感



※ 一人で複数の項目を記載しても最も特徴的な回答一つに絞った

・期待感の具体例

幼児理解

- ・改めて子どもとかかわることが楽しく、子どもが大好きだと実感する。
- ・子どもを観察し行動の意図を考えることができる。

保育理解

- ・なりたい保育者像や理想の保育について考えられるようになる。
- ・仕事のやりがいについての考え方が感じられる。

自己向上

- ・援助、指導案作成など保育力が上達している。
- ・子どもたちへのコミュニケーション力が高まる。

進路

- ・幼稚園教諭か保育士になりたいかの迷いが解決の方向に向かう。
- ・今よりもっと幼稚園の先生になりたいくなる。

幼小連携

- ・小1プロブレムの解消のため幼稚園の先生の視点を身につける。

2) 教育実習で学びたいこと

学生が期待する教育実習での学修は、大きく4点に集約された。(表1)

一つ目は、環境構成についての学修である。幼児教育の本質が環境を通しての教育であり、

保育者としての如何に環境構成を整えるかは最大の課題といえる。その意味で学生の関心が環境構成にあるのは良く理解できる。保育室やホールの物的環境、環境としての保育者の存在及び主体的な遊びが保証される為の環境と広範囲にわたっての学修を期待している。

二つ目は、幼児理解である。幼児一人一人の発達を的確に把握し、保育のめあて及び内容が導き出されることから、幼児の姿を捉えるため幼児理解は大事な要素であり、学生の関心の高い項目である。

三つ目は、保育者と幼児の関わり方である。実習指導担当の担任教諭をはじめ、保育者の幼児に対する発問がどのような意図に基づいて行われているかである。

四つ目は、幼稚園の社会的役割に関することである。小学校であれば学生の過去経験を遡ることである程度予想がつく部分もあるであろうが、幼稚園となると自身の記憶は断片的であり、その記憶は保育者や友達との関わりや遊びに限定されよう。大学の講義等を通じて、幼稚園における業務や地域・保護者等との連携など教わっているもののイメージしにくいのがその理由と考えられる。また、小学校実習を履修済の4年生はその違いについて知りたい学生が多くいた。また、4年生が理論的な事項を取りあげているに比べ、3年生は実践的な項目を挙げている傾向がある。いずれにしても学生は、教育実習を自己の能力や技能を高める場と意欲的に考えている。

表 1 後期教育実習で特に学びたいこと

環境構成 <ul style="list-style-type: none"> ・ ホール、保育室 ・ 保育者の動き ・ 環境構成と適切な援助 ・ 幼児が主体的な活動ができる ・ どうすれば幼児が楽しく遊べるか 	幼児理解 <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児が遊びを通して何を学んでいるのか ・ 幼児の言動からその意味を理解したい ・ 幼児同士のかかわり合いの影響 ・ 年齢と興味・関心 ・ 前期実習からの幼児の成長 ・ 深く遊び込んで見えてくる心の動きや遊び方
保育者と幼児とのかかわり方 <ul style="list-style-type: none"> ・ 幼児を引きつける導入 ・ 年齢と発達に応じたかかわり ・ 注意、叱り方 ・ 分かりやすい発問 ・ 幼児が成長・変化する瞬間の声掛け・援助 ・ 保育者の意図性とかかわりの関係 	機関理解 <ul style="list-style-type: none"> ・ 保育者間の連携 ・ 小学校との違い ・ 幼稚園教育の基本 ・ 保育者として働く楽しさ ・ 保護者対応
5	

3) 実習に対する不安・心配

学生が、実習に向けて心配・不安と思っていることを表2にまとめた。

その結果、大きく5つの項目に分類された。

一つ目、ピアノや手遊び等の保育技能についてである。入学時点でピアノができる学生は多くは無い。その学生たちが幼児や保育者の前で自信を持って伴奏や弾き歌いするのは確かに難しいものがある。手遊びや絵本読みも模擬保育等で何度か実施しているが、実際に幼児の前で行うとなると不安に駆られるのは仕方が無いのかも知れない。しかし、十分な準備をすることで実習経過の中で力が発揮できると思われる。

二つ目は、態度・マナー等の社会人としての礼儀に関する事項である。確かに、巡回指導で実習園を訪問した際、この点を指摘されることが少なからずある。そのため、事前指導や関連の授業等でこの点に触れることが多くある。その事が学生のプレッシャーとなって意識されていると思われる。また、実習先は私立幼稚園が多くその設立母体が宗教関連のため特別な配慮が必要と考えているようである。更に、実習指導者に迷惑を掛けたくないの思いから、先生への声掛けについても不安が挙げられている。

三つ目は、指導案と日誌についてである。指導案については、事前指導の場や保育内容の指導法などで機会をみて指導した結果、近年実習園から「良く書けてますね」との評価をいただくことが多くなっているものの、学生にとっては自身の資質や能力が見透かされるものとして判断されるようである。

表2 実習において心配のこと

保育技能	実技→ピアノ、歌、手遊び、絵本等	指導案・日誌	指導案 日誌
態度・マナー	失礼がないか 人前に出るのが苦手 宗教の知識がない 先生への声がけタイミング	その他	認定こども園である 他の実習生との比較 職員との連携
対幼児	仲良くできるか 笑顔で接する 一人ひとりと向き合う 特定の幼児としか関わらない 見本になれるか 女性の職場 どのくらい子どもと遊んで良いか 叱り方 幼児についての知識不足 幼児に悪影響を与えないか 観察的で傍観しないか トラブル対応		教員としてできるか 充実してやりたいことが変わる 就職活動との並行 小学校と違い学ぶ内容が明確でない 信頼してもらえるか やりたいことが沢山で目的が迷走 何が不安か分からない不安 失敗を恐れての萎縮 母園でない 体調管理 幼児教育についての理解が不足

その他、「何が不安かわからない不安」に代表されるように、学生にとって幼稚園はブラックボックスとなっているようで、その事がに多岐にわたった心配・不安を抱かせている。この事を踏まえうえて、学生の心配・不安について講義や個別の指導場面において、取り除いたり軽減する配慮の必要性があると考えられる。

4) 前期実習の実習園評価と学生の自己評価

表3は、3年生が5月に実施した1週間の前期実習における実習園評価の評価と学生による自己評価の比較である。項目は、総合評価を入れ全部で14項目に分かれている。各項目の評価は「とてもよい」から「劣る」までの5段階評価とし、得点化して平均点を算出した。「環境構成」「保育の計画性」「衛生・安全への配慮」については、前期は観察実習が主なため評価不能として空欄の園が多かったため、今回の考察から除外する。

学生の自己評価が実習園の評価を上回ったのは「積極性」「協調性」「幼児との関わり」「提出物」「実習中の反省」の5項目であった。学生が、積極的に保育や幼児との関わりを求めて意識的に活動している自己の姿に対して、実習園では充分と言えないと評価している。このことは、観察実習に対する養成校の考えと実習園の認識のズレがあるのかも知れない。学生としては観察実習においてできるだけ積極的に動いているつもりであるが、実習園としては積極性や幼児との関わり不足として捉えているのではないかと思われる。

表3 前期実習における実習園評価と自己評価

	礼儀	明朗	積極	協調	関わり	理解	環境
実習園評価	3.86	3.61	3.80	3.57	3.61	3.63	3.39
自己評価	3.91	3.77	4.30	4.25	4.14	3.80	4.11
差(自-園)	0.05	0.16	0.50	0.68	0.52	0.16	0.72
			**	**	**		(**)
	計画	衛生	実践	提出	記録	反省	総合
実習園評価	3.54	3.22	3.31	4.10	3.43	3.52	3.57
自己評価	2.93	4.23	3.21	4.73	3.11	4.16	3.57
差(自-園)	-0.61	1.01	-0.10	0.63	-0.31	0.64	0.00
	(**)	(**)		**	**	**	

※ 差[自-園]が大きいほど、自己評価が実習園評価よりも高い。

※ (**)は、実習園評価の回答が少ないため比較から除外した。

** P<0.01

反対に実習園の評価が実習生の評価を上回ったのは「記録の仕方」である。前期の記録の提出は主に日誌における幼児の実態や保育者の動きの他感想等であるが、これらは前述した学びたいことと関連が深い項目であり、それらの課題意識を持って記録しているものによるものと思われる。ただ、実習園が求める日誌記載の仕方や要点が実習園によって異なるため、それに対応できているかの戸惑いがあるためと思われる。

4. まとめ

以上の分析結果をまとめると以下の通りである。

1. 実習への期待感から幼児理解・対応を含め、自己を向上させてくれるものとして、意欲的に実習に臨んでいる。
2. 実習を自己の進路指針として捉えている。
3. 実習での学びは、保育者には幼児に応じた声掛け等の適切なかかわり方、幼児にはその言動の意味を学びたいと思っている。
4. 実習での心配事は、保育技術の未熟さ、全日指導案の作成、先生への声掛けのタイミング、トラブル対応等と多岐にわたる。
5. 前期実習評価では、積極性、協調性、幼児とのかかわり、記録の提出、反省等5項目で、実習園評価と学生の自己評価に有意な差が見られた。
6. 実習に対して、4年生は論理的な学びを、3年生は実践的な学びをイメージしている傾向が見られた。

学生は、教育実習に対して真面目に課題を持って学びの場として意欲的に取り組もうとしている姿が見られた。その一方で、未知の世界に飛び込んでいくような不安を感じている姿も見られた。養成校として学生個々の思いを真摯に受け取り事前事後指導に当たらなければならないとの思いを強くした。また、評価の観点から前期1週間実習の目的と内容のすりあわせを養成校と実習園で行う必要性を強く感じると同時に、学生の教育実習に対する真摯な姿勢を実習園に伝え理解を得るための方策を考えていきたい。

(本稿は、平成29年8月7日に行われた、岩手県私立幼稚園・認定こども園連合会主催、平成29年度第1回教員研修会の講演をまとめたものである。)